

琳派展21

没後200年 中村芳中

2019年 10月26日(土)～12月22日(日)

当館恒例の琳派展の第21弾は、没後200年を記念して中村芳中(?～1819)を特集します。中村芳中は、江戸後期に京で生まれ、大坂を中心に活躍した琳派の絵師として知られています。

はじめ大坂の文人たちと親しく交わり、文人画風の山水画を描いたほか、指頭画の名手としてその名を知られる存在でした。また当時、自由な気風の画家として着目されていた尾形光琳に触発され、琳派が得意とした「たらし込み」を多用した草花図を描き、「光琳風」の画家として広く親しまれました。一方、生涯にわたって俳諧を好み、多くの俳人と交流しながら俳画や俳書の挿絵などを手掛けています。

本展では、近年そのゆるい表現が「かわいい」と評される芳中の作品の数々を紹介します。琳派風の草花を描いた屏風や扇面、人気の高い版本『光琳画譜』(享和2年刊)のほか、文人画風の山水画や指頭画、俳画や俳書の挿絵など、ほのぼのと愛らしい芳中画の世界をお楽しみください。

展覧会名	琳派展 21 「没後 200 年 中村芳中」
入館料	一般 1,400 円 (1,300 円) 学生 1,100 円 (1,000 円) ※ () 内は 20 名以上の団体
開館時間	午前 10 時～午後 6 時 (入館は午後 5 時 30 分まで)
休館日	毎週月曜日 (祝日の場合、翌火曜日)
主催	細見美術館
会場	細見美術館 〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町 6-3 TEL 075-752-5555 FAX 075-752-5955 http://www.emuseum.or.jp



中村芳中〈花卉図画帖〉より「七月 芥子」 細見美術館蔵



中村芳中〈花卉図画帖〉より「十月 白菊」 細見美術館蔵

中村芳中 <なかむら ほうちゅう> ?～文政2年(1819)

京に生まれ大坂に住み、尾形光琳の画風を学んだ絵師としてその名を残す(『画乗要略』天保3年序)。寛政期(1789～1801)には、木村蒹葭堂ら大坂の文人たちと交流を持ち、指頭画の名手として知られていた(『虚実柳巷方言』寛政6年序)。寛政11年(1799)、江戸へ向けて出立。享和2年(1802)に『光琳画譜』を刊行し、光琳風の絵を描く絵師として知られるようになった。一方、俳諧を好み、江戸や大坂、尾張などの俳人たちと広く交友していた。「たらし込み」を多用した琳派風の草花図、軽妙な俳画などを多く描いた。



中村芳中『光琳画譜』より「仔犬」
享和2年(1802)刊 個人蔵

◆「なごみ系」画家

芳中の作風は、ひとことで言うと「おおらか」。太くて緩やかな線描、水分の多い墨や絵の具による彩色、単純化して大きく描いた動植物や人物—。芳中の手にかかると、どれも穏やかで「ほのぼの」とした絵になります。また、俳人と交友を重ね、俳画や俳書の挿絵にも筆を振っています。俳諧の持つ軽やかさと芳中の力みのない作風が調和し、「ゆるい」けれど味わい深い絵を残しました。



中村芳中〈六歌仙図〉 新古美術わたなべ蔵

◆技巧派な側面も

一見、素人が描いたようにも見える芳中画。ところが、芳中は筆以外の物を使って描く「指頭画」を得意とする画家として、大坂で知られる存在でした。宴席で描いては人々を楽しませていたことでしょう。さらに、芳中は琳派が得意とした「たらし込み」に着目。色をぼんやり滲ませたおおらかな絵は、まさに「芳中による琳派」。興味をもった技法を試してみても、描く本人が一番楽しんでいただけたのかもしれない。



中村芳中〈白梅小禽図屏風〉 細見美術館蔵

<本展覧会に関するお問い合わせ>

広報担当 三宅由紀

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町 6-3 TEL 075-752-5555 FAX 075-752-5955

E-Mail kouhou@emuseum.or.jp

※画像資料提供のご依頼は「資料(画像)フォーム」をご利用ください。